

## 緯度観測所初代所長・木村栄と水沢宝生会

比較日本学教育研究センター研究協力員

国立民族学博物館

馬場幸栄

伊達家は能楽において喜多流を愛好したことで知られるが、かつて伊達藩領であった奥州市において現在最も盛んなのは喜多流ではなく宝生流である。奥州市で活動する宝生流のグループ「水沢宝生会」の会員数は、同市にある喜多流の水沢喜多会と喜嚶会の会員数、あるいは観世流の水沢観世会の会員数を遙かに上回っている。このように奥州市において喜多流よりも宝生流が盛んとなった背景には、同市の水沢区にかつて存在した臨時緯度観測所の初代所長・木村栄の存在がある。

木村栄は明治から昭和にかけて活躍した世界的な天文学者である。木村は奥州市水沢に設置された緯度観測所の初代所長に 29 歳の若さで就任し、地道で辛抱強い観測と数学的なひらめきによって地球の緯度変化を示す計算式に必要な「Z 項」を発見した。1902（明治 35）年 1 月に発表された木村の「Z 項」は世界の天文学者や測地学者を驚嘆させ、日本の科学力を海外に示すことに大きく貢献した。その功績が讃えられ、木村は第 1 回学士院恩賜賞、英国天文学会ゴールドメダル、第 1 回文化勲章など数々の賞に輝いた。さて、偉大な天文学者であった木村は学問だけでなくスポーツ・美術・芸能の愛好者でもあった。観測所所員たちにスポーツ・美術・芸能を推奨しただけでなく、自らもテニスや書道をよくし、研究の合間に楽しんだ。謡曲は、そんな木村が好んだ趣味のひとつであった。

じつは木村は金沢の出身だった。金沢といえば、「加賀宝生」と言われるように宝生流が極めて盛んな地域である。しかも奇遇なことに、観測所に隣接する駒形神社にも宝生流に長じた當山亮道が宮司として赴任してきた。1907（明治 40）年、木村と當山は木村を初代会として「水沢宝生会」を立ち上げて、地元の名士たちを集め宝生流の稽古を開始した。これが、こんにちもなお奥州市において盛んな水沢宝生会の起源である。

本発表では、木村栄の天文学者としての活動と水沢宝生会での活動について、木村の生い立ちや彼と観測所所員および地域住民との関係に注目しながら考察する。